

< ご案内 > -----

竹内 忍 (元信濃むつみ高等学校教頭)

東日本大震災、そして福島原発事故。

10年経った。

マスコミやネットなどから流れ広がる「復興」の言葉。

しかし、現実には復興とは程遠く、

傷を負ったままのいのち、壊されたままの生活や人間関係、

いまだに故郷に帰ることができない多くの被災者、

復興ではなく、「忘却」と「隠蔽」がとめどもなく進行している。

原発事故は、人に、社会に、自然に対して、数十年、数百年以上におよぶ影響、被害をもたらし、

それは福島から遠い信州でいまを生きる若者たちの、これからの人生と共にあるものでもある。



©takeuchi

松本市南松本にある信濃むつみ高校。

2011年の夏から10年間、毎年3~4回、毎回7~8名の生徒たちと、

東北の津波被災地でボランティア活動をし、また福島の原発被災地の現実に向きあってきた。

一方で中国の旧満州地域、タイのチェンマイ、沖縄辺野古やヒロシマなどといった様々な現地でのフィールドワーク、

そして環境、いのち、ジェンダー、人類、アジア、社会参画など学校オリジナルの科目において、

自分と社会の問題に取り組み、自分と世界を繋ぐ自分なりのテーマでのレポート作成といった言葉化もおこなってきた。

信濃むつみ高校での生徒・教員スタッフたちとのこうした様々な体験や活きた学びの企画と実践をベースに、

「地球が教室」(エスペラント語で Tera Klaso) をコンセプトとして、

松本駅前に「学びと体験 / 読解と論述ゼミ Tera Klaso」を新たにスタートさせる。

中学生から大人まで様々な人たちが出会い、体験を共同化し、学びを共有し、

自分自身が、また自分たちが生きる街や地域や社会が、共に生きる現在と未来において、

希望のある豊かさを手にすることができる、

そんな試みを一緒に創っていく場として。



©「大地を受け継ぐ」製作運動体

映画「大地を受け継ぐ」。

原発事故から4年目、いのちを奪われた哀しみや怒り、

痛みを抱えながら福島の地で農業を営む母と息子。

そこを訪れ、その2名が語るほぼ独白に近い4年間の経験と想いの言葉を聞き、

その言葉の向こうにある圧倒的な現実に向きあう、11人の高校生や大学生などの若者たち。

彼らはそこでのたった1日の体験から何を受け継ぐのか、

そしてこの映画を観た人たち、若者たちは、自らの人生に何を受け継ぐのか。

「Tera Klaso」オープニング企画。

長年ドキュメンタリー映画をはじめ世界各地の様々な秀作を上映してきた、

「NPO 法人松本 CINEMA セレクト」との共催により、

「映画『大地を受け継ぐ』を観て、現在と未来を考える」を実施する。

映画「大地を受け継ぐ」の上映、

ゲストに迎える小出裕章さん(元京都大学原子炉実験所助教)と2人の映画監督、

高校生など若者とのトークセッション、

2つの企画を軸に、

現在と未来を生きる若者・オトナたちとの希望のありかを考える契機としたい。

特別企画：松本 CINEMA セレクト上映会。

井樫 彩監督の最新作「NO CALL NO LIFE」の上映と、

井樫監督のアフタートークも急ぎょ決まりました。

時代と社会に向きあう、多彩な1日をお楽しみください。



©2021 映画「NO CALL NO LIFE」製作委員会